



年 組 名前

道新ワークシート

牛乳生産 道産飼料で

よつ葉乳業（札幌）は8月、道外の共同購入グループ向けに、道産の非遺伝子組み換え（ノンGMO）配合飼料で育てた牛の牛乳を新発売する。配合飼料の主原料は大半を輸入していたが、うち約4割を道産に切り替える。割合はまだ半分未満だが、輸入飼料に頼らない酪農経営の実現に向けた大きな一歩となりそうだ。

新商品は①乳脂肪を均質化しないノンホモジナイズド②低温殺菌③通常の3タイプで、いずれも1リットル入り300円程度。同社の牛乳総出荷量の約5%に当たる年間500万本の販売を見込む。

同社は1972年から首都圏などの消費者でつくる共同購入グループに牛乳の直送を始め、99年にはノンGMO牛乳を商品化。以前から飼料の道産化を求める声が多く、十勝管内の酪農家14戸やホクレンと協力し、商品化にこぎ着けた。

配合飼料は牛など家畜のえさで、原料となるトウモロコシや大豆は多くを米国や南米などからの輸入

よつ葉が新商品 輸入依存脱却へ一歩

に頼っている。国内で流通している牛乳は全て国産で、チーズなどを加えた「牛乳乳製品」の食料自給率も59%（2019年度）あるが、飼料を加味すると25%に下がる。

配合飼料価格は、穀物の国際相場や為替で乱高下し、酪農経営を不安定化させる要因にもなっている。特に今年は中国の大量輸入で国際相場が高騰。農林水産省の農業物価指数では、4月の1リットル当たりの小売価格（乳用牛飼育用）は、前年同月比13・3%増の7万9810円に。付加価値が高いノンGMOの飼料価格はさらに高く、この傾向は当面続くと思われる。

道内では近年、人口減による消費減でコメから飼料用トウモロコシへの転作が進む。北海道農政事務所の聞き取り調査では、飼料用トウモロコシの20年の作付面積は、17年比83%増の686千haに拡大している。自給飼料に詳しい酪農学園大の荒木和秋名誉教授は「よつ葉の取り組みは日本農業が目指すべき自給率向上に寄与する」と評価する。（生田憲）

2021年6月28日（月）朝刊 全道遅版 総合 1P

①日本の「牛乳乳製品」の自給率はどのような状況か、記事を読んで書いてみましょう。

②配合飼料を輸入に頼ることで、酪農家にとってどのような問題がありますか、記事を読んで書いてみましょう。